

買物は投票だ。
資源循環の社会経済へ、
地産地消を推し進める政策を



NEWS!

2022. 6月号

使い捨ての生活からの脱却で持続可能な地球環境を次世代に

[発行] NPO 法人グリーンコンシューマー大阪ネットワーク

●〒565-0842 吹田市千里山東 1-14-26 ほぼエコcafé&Gallery NAZ(ナーズ)内

●年会費 1 口 2000 円(個人 1 口以上、学生半口以上、団体 3 口以上、賛助会員(会社)5 口以上)

●郵便振替 00920-8-154437 ●TEL06-7222-800 ●E-mail greencon@g2.xrea.com ●http://www.greencon@g2.xrea.com

公害の原点「水俣」が現代に問いかけること

アイリーン・スミスさんが語る

環境に負荷をできるだけかけずに生活をしていく一員として、
環境と人をむしばむ公害のない社会をつくることは、一つの使命
です。「水俣病」をカメラから世界に発信し、衝撃を与えました。

3月5日、エルおおさか・ZOOM 含めて78人の参加をいただきました。
この映画は、ユージン・スミスとアイリーン・スミスが1975年が出版した
写真集「MINAMATA」が原作です。昨秋に公開された名優ジョニー・デップ
主演のハリウッド映画「MINAMATA」が実現するまで7年。ドキュメンタリー
でなく、商業映画に舵をきったことの葛藤、懸念など赤裸々に語られたのが
印象的でした。



水俣病被害者は7万4千人、認定患者はたった1600人、認定求める裁判継続中

水俣病は、1953年熊本県水俣市の海岸部で「ネコ踊り病」が多発、5歳の女兒が第1号患者として認定され、56年に公式に水俣病と確定されました。被害者は約7万4千人。現在も裁判件数10件、原告数千人いるが、認定は1600人のみという不条理が続いています。4,5歳で水俣病を発症した第2次世代が裁判の中心になっています。が、国の認定制度が、公衆衛生における疫学的知見に立っておらず、間違っているとしか言いようがないとアイリーンさんは怒りを込めて強調されました。かかりつけの医者の診断書すら無視して認定棄却されていることは、原監督制作のドキュメンタリー映画「水俣曼荼羅」で明らかにされています。

裁判が全国で起こっているも認定数が増えない根本的な原因は、水俣病申請者含めて当時の住民への健康調査が一度もされていない「事実の隠蔽」は、今も霞が関や政府の本質で、データーをださない、責任をだれも取らない、世界中を震撼させたフクシマ原発事故でも同じだったではないか。

なぜ、ハリウッド映画に？



発生から70年近くたって、水俣病を知らない世代が多い中で、いつ自分の身にふりかかるか分からないことを知ってもらうために、普通の市民が関心を持ってもらうベクトルに変えました。メリットは、ジョニー・デップ、真田広之など名優がでることにより公害問題に無関心層に切り込むことができたのではないかと。この制作現場は、モンテネグロが撮影地で、スタッフ・エキストラは東ヨーロッパ在住の日本人70人以上の若者が協力していただいた。その後、中高生や大学生など学校での授業もできるようになり、次世代との意見交換の場も広がったことはうれしい。映画監督アンドリュー・レヴィダス

は、最後のエンドロールに、世界で広がる公害、原発事故など企業犯罪について流すことを約束されました。海外上映でもカットされることなく流れています。

一方デメリットは、配給会社の圧倒的な力により妥協せざるをえないこともあったこと。患者家族との約束でどうしても使ってはいけない写真の引用、事実とちがう場面、チツソ社長とユージン・スミスとのやり取りなど。今も思うことは、ユージン・スミスが写真家だけでなくジャーナリストとして描かれていたかの評価です。

反原発運動のきっかけは？

京都に住んでいるので、スリーマイル原発事故がおこり、若狭の原発が心配で反原発運動に関わりだしました。地震がある日本ではとくに原発は危険です。影響を受けるのは真っ先に子どもたち、そして女性です。廃炉になるまでに、もし事故が起こった時の避難計画づくりは、生活に立脚した女性たちが中心になるべきで、建前論を言う男性に任せてはダメです。現状を知る地元の人たちが専門家であり意見をどんどん言い、行動しなくてはなりません。フクシマ原発事故後の避難シミュレーションは、肝心なことが隠され、避難が遅れに遅れ、さらに、避難した場所がもっとも放射能汚染がひどかった地域もあり、ひどい状況でした。

水俣と福島そして沖縄に共通する10の手口とは

1. 誰も責任を取らない、縦割り組織を利用し、隠れ蓑とし情報公開をしない
2. 被害者や世論を混乱させ「賛否両論」に持ち込む。福島原発事故による農水産物の放射能汚染を風評被害、放射能汚染水を「処理水」とする
3. 被害者同士を対立させ、運動を分裂させる
4. データーを取らない、証拠を残さない 森友・加計でも同様
5. ひたすら時間稼ぎをする 裁判はいまだに続く
6. 被害を過小評価するような調査をする
7. 被害者を疲弊させ、あきらめさせる
8. 認定制度を作り、被害数を絞り込む
9. 海外に情報を発信しない
10. 御用学者を呼び、国際会議を開く。政府の常套手段で、マスコミはその検証もせずそのまま流す。

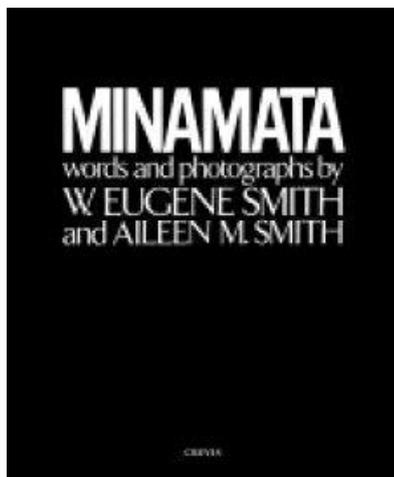


お話されるアイリーンさん

市民が動くことの大切さを実感できたこと

映画「MINAMATA」の公開前の上映会は、水俣市民が主体でやっていただいた。それも実行委員会の主力は30歳代の人たちでした。実行委員長は夫がチツソ株式会社に勤務するという女性だったことにはびっくりしました。水俣市は、公害をばねに環境にいいまちづくり、有機栽培を主力とする農産物を全国に出荷するまでに市民が主役のまちな変身したことは大きいといえます。

これからも10の手口を抑えられる市民運動を共にしていきましょう。



写真集「MINAMATA」

写真集「MINAMATA」

～過去の誤りをもって、未来に絶望しない人々に捧げる～

出版社 Creviis 4,400円

フォト・ジャーナリストの最後の仕事



関連書籍

ユージン・スミス
写真集

2,750円